
Lora's trip

Blue Noah

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L o r a ' s t r i p

【Nコード】

N 1 3 5 1 X

【作者名】

B l u e N o a h

【あらすじ】

原因不明の災害で崩壊しようとしている世界。探検家のカイリユー・ローラは、災害の真相を探るために旅に出る。様々な出逢いや経験を重ねる中、最後に辿り着く真実とは――
ポケダンベースのオリジナルストーリー

Exploration・1 ローラ（前書き）

なんとか書くことが出来ました。小説に関する調べ事をしていてこんな時間に。

本当は効率よく更新をするためにストックを幾つか作っておきたかったのですが、サイトにも慣れたので1話だけ投下しておくことにします。

Exploration・1 ローラ

木々が生い茂る森の中。葉の隙間から日光が、地面の土や枯れ葉、雑草を照らしている。葉が風に揺られて擦れる音。風が吹き抜ける音。

様々な環境音が聞こえるが、そのポケモンにはそんなものに聞き入っている余裕はなかった。

細長い胴に短い手足、茶とベージュの縞模様を持つそのポケモンはオオタチという種族であった。その身体は酷く傷ついており、苦しげに呻き声を漏らしている。

オオタチは森の中に食物を取りに来たところを、近くに住む野生ポケモンに襲われた。派手にやられてしまったため動くことなど出来るはずもなく、この森はあまりポケモンが訪れない為自力で抜け出すことも出来ない。

もしかすると、自分はそのまま……。ふと頭に過ったその予感、少しずつ現実になりつつあった。

「ん？ てめえ、何オレの縄張りで昼寝してやがる？」

何処から現れたのか、オオタチに話しかけてきたのは、スズメバチの様な姿で腕に大きな針を持つポケモン、スピアー。少なくとも有効的な相手ではない。

「ち、違います！ 僕はこの森に食べ物を取りに来て、それで森にすむポケモンに襲われて……」

力を振り絞りオオタチは必死に事情を説明する。もしかするとこれで理解してくれるかもしれないと、僅かな希望を抱きつつ。

「てめえが誰に襲われようがオレには関係ない。それより、俺の縄張りで食糧探した？ それは見逃すわけにはいかねえな」

しまった。これでは逆効果ではないか。スピアーの腕にある針を向けられながら、オオタチは後悔の念に駆られた。しかし既に後の祭である。スピアーが針をこちらに向けてゆつくりと近づいてくる。そして一気に間合いを詰め、その針で突き刺そうとした——刹那

突如、辺りを強い風が包み込んだ。同時に、突然現れた大きな影にスピアーが吹っ飛ばされ、オオタチは思わずその場に伏せる。大きな影はオオタチに背を向けたまま、起き上ろうとするスピアーに構えている。

「だ、誰だてめえ！ コイツの仲間か！？」

スピアーは大きな影に叫ぶ。オオタチが顔を上げると、そこに居たのはとても大きなポケモン。

大きな山吹色の身体に太い尻尾、頭には帽子を被っているが角と触角の様な器官が二つ見えており、そして背中からは大きな身体には少し小さめの翼が一对生えている——ドラゴンポケモンのカイリユーだった。頭には探検帽、首には赤いスカーフを巻いており、肩からはトレジャーバッグと呼ばれる鞆を掛けている。

先ほどの風はこのカイリユーの翼から発生したもので、スピアーを吹っ飛ばしたのもこのカイリユーだろう。

「私？ 私は見ての通りカイリユーだよ。それより、君は何でこの

オオタチ君を攻撃してたの？」

「見ず知らずのてめえには関係ねえだろ！ オレの縄張りに勝手に入ったコイツが悪いんだ！」

いきなり現れ、口出ししてくるカイリユーにスピアーは苛立っていた。口調はかなり荒く今にも襲いかかってきそうな雰囲気です。

「確かにそうかもしれないけど、このオオタチ君は怪我をしてるよ？ それなのに攻撃するの？」

「うるせえ！ てめえに何が分かる！」

ついに、スピアーが動いた。その針をオオタチからカイリユーへと向け、一直線に迫ってくる。だが、スピアーはこの後敗北することになる。二つの針がカイリユーの数センチ手前まで迫った時、突如カイリユーの姿が消え、背後に現れたのだから。

「本当は話し合いで分かってもらいたかったんだけど……ごめんね」

一言、カイリユーはスピアーに“謝る”。その直後、スピアーは糸が切れた操り人形のように倒れこむ。

スピアーの針が迫った時、カイリユーは“高速移動”でスピアーの背後に回り込んだ。そしてそのスピードを維持したまま、スピアーの急所に“ドラゴンクロー”を叩きこんだのだ。

「君！ 大丈夫！？」

スピアーが動かないのを確認すると、カイリユーはすぐにオオタチに駆け寄った。オオタチは先ほどのやり取りでまだ啞然としてお

り、カイリユーの問いかけに反応するのに少々時間を要した。

「えっ、あ。は、はい……」

そう答えるが、相変わらず傷は痛む。それを見たカイリユーはトレジャーバッグからある物を取り出す。

「はい。これ、オボンの実。これで少しは余裕が出来ると思うからオオタチは受け取ったオボンの実を口に運び、少しずつ飲み込む。オレンの実に似た、様々な味が口に広がる。

「あ、ありがとうございます。少し楽になりました……」

「うん、よかった。とにかくこの森から出よ？ 私が運んで行くから」

カイリユーはオオタチを腕で抱え上げ、背中の翼を広げる。

「そっいえば、あなたの名前は？」

よく考えると、まだ名前を聞いていなかった。オオタチはカイリユーに名前を問う。

「あっ。まだ名前、言ってなかったね」

翼を何度か羽ばたかせ、カイリユーがオオタチの方へ顔を向ける。

「私はカイリユーのローラ。よろしくね」

笑顔でそう名乗ったカイリュー——ローラは地面を蹴り、空へと舞い上がった。

Exploration : i ローラ（後書き）

うゝむ……小説を書くのも結構難しいです。これから頑張ります。

Exploration・2 依頼

「助けていただいて、本当にありがとうございます！」

「お礼なんていいよ。困った時はお互い様でしょ？」

頭を下げて感謝するオオタチに対して、笑顔でそう返すカイリュのローラ。オオタチを森——“樹海の森”から連れ出した後、ローラは一番近くにある小さな町、“レストタウン”へと運んだ。“樹海の森”の周りは草原に囲まれており、その草原を西に向かったところにその町はあった。

オオタチの怪我は見た目ほど重症ではなかったらしく、町の診療所で手当てをする程度で済んだ。その診療所で、手当てを終えたオオタチがローラにお礼を言っているところである。

「あつ、そうだ。よければこれ、受け取ってください」

一体何処から持ってきたのか、オオタチが木の実が沢山盛られた大きなバスケットを差し出してきた。ポピュラーなものから少々珍しい物まで、色鮮やかなさまざまな木の実が入っている。

「えっ？ う、受け取れないよ。こんな立派なもの……」

依頼を達成したり、救助をしたときにはお礼として品物やお金を受け取ることがごく当たり前のこと。しかし、これはあまりにも大袈裟すぎる。ローラとしては当たり前のことをしただけなのに。

「いえいえ。僕はこの町で木の実屋を営んでいますので、この程度は……。それに、もしあの時貴方が助けてくれなかったら、僕はど

うなっていたか分かりません。だから、このくらいお礼はしないと」

「それじゃあ、ありがたく受け取っておくね。本当にいいの？」

ローラはオオタチからバスケットを受け取る。しかし、やはりまだ遠慮してしまう。

「遠慮しないでください。それじゃ、僕はこの辺で失礼しますね。本当に、ありがとうございました！」

再び深く頭を下げ、オオタチはお礼を言っただけでその場を後にした。

翌日 レスタウン AM 6:00

月が地上から姿を消し、入れ替わりに朝日が地を照らす。朝が訪れた町は少しずつ活気づいていく。

ローラの自宅はレスタウンにある。身体のかなんない種族だけあって家は大きく、石造りの二階建てになっている。

朝日を浴びて、ローラは寝室で目を覚ました。意識が完全に目覚めないまま、洗面所で顔を洗う。食事を済ませ、彼女は仕事の準備を始めた。

探検家の仕事と言っても、いつも未開の地を冒険したりお宝を探したりするわけではない。普段は依頼を引き受けたら、遭難したり襲われたりしたポケモンを救助等、困っているポケモンの手助けが仕事である。

今日の仕事は、以前から予定に入っていた依頼。内容は、依頼人である新米探検家の探検のサポート。レストタウン西部にある山岳地帯を、探検家成り立ての新人と登山するというもの。

早々と支度を済ませ、ローラは家を出た。夜に雨が降っていたのか、地面が全体的に濡れている。

依頼人はレストタウンの北部にある川沿いの町に住んでいる。そこまでは約2キロで、カイリユーであるローラならばすぐに着く距離である。

翼を広げ、何度か羽ばたかせて動きや風の具合を確かめる。そしてタイミングを見計らって地面を蹴り、同時に翼をより強く羽ばたかせ、彼女は朝焼けの空へ飛び立った。

十数分飛び続けると、やがて大きな川が目に入る。そしてその近くに依頼人の住む町——ノースリバータウンがあった。

ローラは高度とスピードを下げ、町の中央に降り立つ。人通りはそれなりに多く、種族が種族の為やはり目立つ。しかしそんな人目は気にせず、集合場所である町役場へと足を進めた。

「あつ。あれかな」

町役場の近くまで行くと、役場前のベンチに一匹のポケモンが座っていた。

黄色い体色をもつネズミに似たそのポケモンは“ピカチュウ”と呼ばれる種族である。頬には電気袋と呼ばれる赤斑点の様な電気を生成する器官があり、稲妻の様なギザギザの尻尾、耳は先が黒くなっている。

依頼人の種族はピカチュウ。集合場所である役場前に居て、トレジャーバッグを掛けているため間違いないだろう。

「ねえ、ちよつといいかな」

「え？ お姉さん誰？ あ、もしかして……」

近寄って声を掛けたローラに、ピカチュウは振り返って首を傾げる。身長差があるため少し見上げるようにして。

「うん。私は探検家のローラ。君がテイル君？」

こちらの種族名と名前は伝えてある。相手は依頼人ならば、これで分かるはず。ちなみに“テイル”とは依頼人の名前である。

「うん。はじめまして、ローラさん。僕がテイルだよ」

「はじめまして。確か、“探検家養成所”を出たばかりだったっけ？」

「そうだよ。だからまだ一匹であちこち行ったりするのは、ちよつと怖くて……」

“探検家養成所”とは、探検家や探検隊を志望する者がそれに必要な知識や技術、そして力などを身につける施設である。

探検家になるには“ポケモン探検隊連盟”に申請を行えば誰でもなれる。しかし、当然素人が技術も力もなしに探検活動をするにはリスクが伴う。その為多くの志望者は、養成施設や腕のある探検家の下で修行をすることが多い。

「それは誰でも一緒だよ。まずは、今日の行く所を確認しようか」

「分かった。今日は此处から南西にある山岳地帯を登るんだ。そこは初心者ピッタリだって聞いたから」

「ああ、あそここの山なら私も何度か登ったから知ってるよ。そんなに厳しい山じゃないから、初心者のティール君には丁度だと思うよ」

ティールの言う山岳地帯は、ローラの住むレストタウンの西に位置する。標高は高すぎず低すぎずといった感じで、傾斜もなだらかな場所から急な場所まであるため経験の浅い者にはもってこいの山である。

「それじゃ、荷物を確認して行こうか」

「うん！」

一緒に登るのが楽しみなのか、ティールはやや嬉しそうに答えた。装備や道具などを確認し、ティールを背中に乗せたローラは目的地の山の麓へと飛び立った。

目的地に到着し、登山を始めて数十分。二匹はなだらかな傾斜を登りながら、探検話に花を咲かせていた。

「ねえ。ローラさんは探検隊ランクはどれくらいなの？」

「今はゴールドランクだよ。私の友達はダイヤモンドランクなんだけどね」

「へえ。凄いなあ」

ローラの話に、目を輝かせて聞き入るティール。新人の彼にとって、経験者である彼女の話には興味があるのだろう。ちなみに彼の“凄い”という言葉は、ローラのゴールドランクではなく友人のダイヤモンドランクに対しての言葉である。

「ハア……ハア……あ、橋だ！」

やや急になつてきた坂を登っていると、目の前に谷に掛かった橋が現れた。橋は鉄製だが、かなり古いものらしく大部分は錆付いて穴が空いている箇所もあった。身体の小さなティールは問題ないのだが、ローラは別である。

カイリユーの平均体重は約210kg。彼女がそれより上か下かは分からないが、この錆付いたボロボロの橋が、その身体を支えられるとは到底思えない。

「ど、どうする？ ローラさん」

どうやらティールも、彼女が渡れるのかと思っていたらしい。もちろん、そんなことは彼女自身が既に理解している。

「うーん……」

少し考え込む仕草をしながら背中中の翼を見る。ティールを乗せて向こうまで飛ぶことはできる。だが、出来ればそれはしたくない。

横に目を移すと、そこには遠回りの道があった。時間は掛かるがこちらでも行ける。ルートがあるのだからわざわざ翼を使う必要はない。

「ねえ、ティール君。遠回りになるけど、こつちもに道があるからそつちにしない？」

「いいよ。ローラさんの翼で飛んで行ったら楽だけど、それじゃつまらないもんね」

彼女の気持ちを理解したのか、または同じことを考えていたのか、ティールはそう言った。

身体を脇道に向け、二匹は歩き始めた。

そして、この道の選択が誤りだったと思い知らされるのは、それから数十分後の事だった。

「ねえ。もう半分くらい来たかなあ？」

「ええ。あと少しだから、頑張る——」

その刹那、二人の足は地面の異変に気づいた。その異変——揺れは少しずつ大きくなり、二人は立っていることが難しくなる。

それは、地殻の内部のプレートが断層を境目にして大きくずれ動く地殻変動の一種——地震である。

やがて揺れは収まった。余震の危険もあるが、大きなものは過ぎたようだ。

「ふう……治まったのかな……？」

突然の地震にティールが不安げに呟く。それを落ち着かせるよう

にローラは言った。

「と、とにかく山を降りよう。このままだと土砂崩れとか起きるかもしれないから」

「う、うん……」

テイルを背中に乗せ、ローラは翼を広げる。飛び立とうとした、その時だった。

「っ!？」

突如として辺りに響く大きな音。ふと背後を見ると、自分たちに迫ってくる木々や土砂、そして岩。恐れていたことが起きてしまったのだ。

昨夜の雨で地盤が緩んでいたのか。となると、他の場所でも起こる可能性はある。土砂が迫る中、彼女は咄嗟に谷の下へと飛び降りた。

「掴まって!」

背中に乗っているテイルに叫び、ローラは速度を上げる。あの時上昇する事も出来たがそんな余裕はなかった。とにかく土砂を振り切り、安全な場所まで。

前を見ると横から、そして前方からも土砂や岩が流れ込んできている。あの錆付いた橋も崩れ、破片が落ちてきている。

「振り落とされないようにしっかり掴まって!」

土砂や破片を避けるためにローラは回避運動を取る。バレルローラや急旋回で障害物を避け、その都度ティールは振り落とされそうになる。

さすがはカイリユーと言ったところか。身体を上下左右に振り回されながらティールは思った。その刹那、彼の目の前に大きな樹木が――

「うわっ!？」

彼に樹木が直撃しそうになった時、咄嗟にローラが回転を掛けた。おかげで彼に樹木が直撃することは無かった。

「ティール君！ 大丈夫!？」

「な、なんとか……」

散々振り回された為か、ティールは少しぐったりとしている。

「う、ごめん。酔っちゃった?」

「少し……」

幸い、もう土砂崩れは治まったらしい。十分に高度を上げ、涼しげな風を彼に当てながらローラは彼の住む町へと飛行を続けた。

Exploration・3 世界の“今”（前書き）

少々遅れましたが更新です。

途中で集中力が切れたため後半の文は酷いモノになっています。ご了承ください。

Exploration・3 世界の“今”

「はい。着いたよ」

やがて、テイルの住むノースリバータウンへと到着した。背中に乗せている彼をゆつくりと下ろす。

「ごめんね。危ない目に遇わせちゃって……」

「ううん。ローラさんは悪くないよ。むしろ、ローラさんと一緒に行ってなかったら僕は今頃ここにいなかった。謝られるよりお礼が言いたいよ。ありがとう！」

申し訳なさそうに頭を下げるローラに、彼は言った。

「フフツ、ありがとう」

彼の優しさに、ローラの顔に笑顔が浮かんだ。

だが、依頼は失敗したようなもの。何かお詫びがしたい。そう思ったローラはあることを思いついた。

「ねえ。もしよかったら、丁度昼過ぎだしお昼ご馳走するよ？」

「い、いいの？」

「うん。依頼は失敗しちゃったからお詫びのつもりで。どうかな？」

「じゃあ、お言葉に甘えて……」

「おいしい！」

ローラの奢り^{おご}ということ、二匹は近くの料理店に入った。適当な料理を注文し、少し遅めの昼ご飯となった。

「私はときどき依頼とかでこの町に来るから、その時はいつもこの店で食べてるの。ティール君は？」

箸で料理を口に運びつつ、彼女はティールに聞いた。

「うん……金銭的に外食はあんまり出来ないんだ。こんな機会がないと外で食べることはあまりないよ」

コップに注がれた冷えたお茶を飲み、そう答えた。

十数分して食事を終え、ローラが会計を済ませて二人は外に出た。

「ありがとう、ローラさん。本当によかったの？」

「ええ。ほんのお詫びだから、気にしないで」

優しく微笑んでそう返し、ローラは翼を広げる。

「じゃあまたね、ティール君。またどこかで会えるといいね」

「うん。色々ありがとう、ローラさん」

ティールに別れを告げ、彼女は空へと舞い上がる。そして南へ――

ーレストタウンへと飛び去って行った。

レストタウンに戻ると、ローラは町の図書館へと向かった。

その図書館はそれなりに大きな作りで、本も様々なジャンルの物を取り揃えている。さらに情報収集用としてインターネット接続が可能な端末も用意されており、ハイテクな図書館であつたりする。

彼女が向かったのは“地質”の本棚。そこから『地震学の全て』、『地震のメカニズム』、『地殻変動とプレート運動』等といった地震に関する本を取り出し、中央の机にどすんと置き読み始める。

「……」

内容を理解した上で選んだのか、片っぱしから取っていったのかは分からないが、本の分厚さは並みのものではない。合計五冊の中で三冊目の半分まで達したところで、閉館30分前になってしまった。

残りの時間で二冊と半分を読むのはまず不可能。仕方ないので受付で貸し出し手続きを済ませ、家で読むことにした。

陽が傾き、空や地が夕焼けに染まる。町は買い物に出る主婦や我が家へ帰る子供たちで人通りが^{ボケ}多くなっていた。

反対方向から来るポケモンを避けつつ、ローラは自宅へと足を速める。図書館で借りた本はトレジャーバッグの突っ込んだのだが、あれだけの量を入れたにも関わらず全く膨らんでいない不思議な鞆——構造および製造方法はトップシークレット——なので特に嵩張^{かさば}ることもなかった。

やがて自宅が目視出来る所まで来ると、家の扉前で佇んでいる。一匹のポケモンが目に入る。

青い身体に真紅に染まった大きな翼。四足歩行だが西洋のドラゴンを思わせるような身体を持つそのポケモンは、ボーマンダと呼ばれる種族。ローラと同じくトレジャーバッグらしきものを掛けている。

（えっ。あれは……）

扉の前で前足を使ってノックしているボーマンダに、ローラは近寄って背後から声をかけた。

「ねえ。もしかして……ハーディン？」

「そうだが、こんなところ俺の名前を……おっ」

ローラの顔を見た途端、ボーマンダ——ハーディンの顔が変わる。驚いていた表情は嬉しそうなものへと代わり、笑顔が浮かんだ。

「フフッ。やっぱり。久しぶり、ハーディン」

「……嗚呼。久しぶりだな」

二匹は昔からの友人であり、探検仲間でもあった。会話からして

暫くぶりの再会らしい。

「三年ぶり、かな？ 私が引越したのがそれぐらいだから」

「そうだ。それ以来、全然連絡もしてないからな」

「確かに。あ、とりあえず入って。こんなところで立ち話を何だから」

家の扉を開け、ハーディンの中へ招き入れる。ローラ自身も身体
の大きな種族の為家は大きい。ボーマンダの彼が入っても窮屈では
なかった。

リビングへ案内し彼は椅子に座らせてお茶を入れた。

「ところで、どうして突然こっちに？ 中央大陸に住んでたハズで
しょ？」

ハーディンの前に湯気の立つお茶を差し出し、ローラは反対側の
椅子に座る。

「嗚呼。こっちには依頼で来たんだよ。早めに入ったほうがいいと
思ってた前日に来て、時間に余裕があったからお前に会いに来たって
ワケだ。こんな機会でもないと思大陸に来ることなんてないからな」

前足で器用に湯のみを持ち、中のお茶を口に含む。

「そう。最近そっちはどう？」

「やってくる依頼が増えたよ。それに最近、妙な地震やら嵐やらが
多くて参ってるよ」

「“妙な”？」

彼の言葉に、ローラに疑問が浮かぶ。昼間の地震と何か関連性がある気がした。図書館で借りてきた本も、それが気になって借りてきたのだから。

元々、この地方では滅多に地震は起こらない。ましてやあんな地震など、こちらに来てから一度も経験したことがない。

「嗚呼。季節外れの大嵐に滅多に起こらない大地震……この前なんか、首都でデカイ地震が起こってよ。桁違いの被害が出たぞ。ん？知らないのか？」

驚きの表情をしているローラを見て、彼は問いかけた。まさか知らないなんて思っていなかった。

「う、うん。この町は住んでも不便なことはないけど、結構小さいし近くの町もそれほど大きくないから……どちらかと言えば田舎なの。私はテレビとかそういった類のものは持ってないし、新聞も探検新聞しか取ってないから……」

少し言いづらそうに、顔を下に向けて言った。一般家庭なら普通にあるはずの物が無いと言うのだから当たり前か。

よく見てみると部屋には小さなテレビ一台もなく、パソコン等もちろん見当たらない。隅にあった電話は黒電話で、新聞紙が一枚、テーブルの傍に畳まれて置かれているだけだった。どうやらハイテク機器とは無縁の生活をしているらしい。

「え、えっと……とりあえずこれ読んでみる。結構興味深い事書いてるから」

少し反応に戸惑い、ハーディンは掛けてあったバッグから一冊の本を取り出し手渡す。『謎の災害に迫る』と書かれた二センチ程の厚さのその本は、有名な著者の書いたものだった。

「それにも書いてあるんだが、今世界中で原因不明の災害が起こってるんだ。そのせいで俺たち探検家や探検隊にも救助依頼が増えてるし、さっき話した依頼が増えたつてのも、九割が救助だ」

彼の口から語られる世界の“今”に、ローラは驚きを隠せなかった。自分の知らない間に、世界が大変なことになっていた。

そして、気がかりなこともあった。

「で、こっちはまだ被害は出てないみたいだな？」

「とりあえずはね。ただ、気になることがあって……」

彼女は昼間の地震をハーディンに話してみた。この地方では地震は滅多に起こらないことも。

「あゝ。たぶん予想はしてると思うが、これから増えていくと思うぞ。地震に限らず色々な自然災害が」

「そう……」

出来れば当たってほしくないと思っていた予想が見事に的中した。これから増えていく——この時、彼女の脳裏にある考えが浮かぶ。何か自分に出来ないのだろうか？ 何が原因なのだろうか？ 不思議と行動を起こしたくなった。

「まあ、俺の知ってることはこれくらいだ。お前も気をつけろよ」

そう告げ、ハーディンは席を立つ。

「どうしたの？」

「近くに予約してる宿があるんだ。確か“怨墓露”とかいう格安の宿だったな」

「か、格安宿の怨墓露ね……」

『怨墓露』と言う名の宿——ローラはそれを知っていた。とにかくボロく、深夜の一時から三時にかけてゴーストタイプのポケモンが宿泊客を驚かすとの噂のある宿である。

言うべきか、言わざるべきか。ほんの数秒悩んだところで、後者を選んだ。

「それじゃあな。俺は明日の依頼の後、数日こっちに居るから。また来るよ」

宿『怨墓露』へと向かうハーディンの背中を、ローラは無言で見送った。

Exploration・3 世界の“今”（後書き）

最後の宿『怨墓露』は執筆中に考えたネタです。今思えば何故こんなものを考えたのか分かりません。当然ですが、今話限りで次回には出ません。

ちなみに読みは“オンボロ”。

後書き 2011年10月30日修正

Exploration・4 決意

ハーディンを見送った後、彼女は図書館で借りた本や彼が貸してくれた本——忘れて置いていたただけかもしれないが——を読んでみたり、取っていた新聞の記事に目を通してみたりと、様々な方法で情報を集めていた。だが限られた資料の中で、そう多くの情報を得られるはずもなかった。

その前に、頭にすら入っていなかったかもしれない。ハーディンの話を聞いた時からずっと、ある事を考えていたのだから。

——私に出来る事、なにか無いのかな……

なぜこんなことを考えるのか。それは彼女の性格から来るものである。昔から、ある物事に対して『自分に出来る事は無いのか』という思考を巡らせる事が多いローラ。つまりは“放っておけない”のである。

食事の時も、入浴の時も、そして就寝時まで考え続ける。それが彼女の特徴であり欠点でもあった。そして数時間に亘り考え抜いた結果、ある結論に到達した。それは——

——翌日

この日、ローラは依頼を少し簡単なもので済ませた。といっても普段から難しいものを引き受けているわけではないが、いつもと比べると若干手間の掛からないものを。

引き受けたのは『「樹海の森」から木の実を採ってきてほしい』という内容の依頼。“樹海の森”には凶暴なポケモンがときどき出現するため、戦闘に慣れた探検家などに依頼する者も少なくない。ちなみにこの依頼を出したのは、先日同じ森でスピアーに襲われた“あのオオタチ”である。

「はい。オレンの実五個と、オボンの実三個、マトマの実が四個にカイスの実が一個。それから……」

太陽が真上を通りすぎて間もない頃——ローラは依頼で頼まれた木の実を全て“樹海の森”で集め、依頼人であるオオタチへと届けた。

樹海、と呼ばれるだけあって相当な広さを持つその森では、様々な木の実を目にする事が出来る。この森にすむポケモン達は勿論、近隣のポケモンもしばしば木の実を取りに来る。——時々、「此処は俺の縄張りだ！」等と言い乱暴をする輩も居るが。

「モモンの実が六個、ラブタの実二個……。これで正しいかな？」

「はい。合ってます。しかし、大変じゃありませんでした？ ちょっと頼みすぎてしまつて……」

確かに、多い。頼んだ木の実の合計数は二十一個。さらに種類も多く、場所が場所だけに搜索範囲も広い。相当な手間を掛けてしまったのではと申し訳なく感じた。

だが、ローラは全然、と言い――

「大丈夫。あの森にはよく行くし、何処に木の实がなってるのかも大体は把握してるから。それに、ほら。私には“コレ”があるでしょ?」

——背中の一対の翼を見る。こんなときには空を飛ぶ手段があるほうが便利である。天候や体調などに左右されるが、広範囲を短時間で行き来する事が出来る。

「確かに、そうですね。僕は地面しか移動できませんから。では、お礼の三千ポケです。またいつか、お願いしますね」

用意していたお礼のためのお金が入った小さな麻袋を差し出し、オオタチはローラに頭を下げる。少し屈んで麻袋を受け取ったローラはそれをトレジャーバッグに入れ、最後にこう言った。

「うん。こちらこそ。じゃあ、またね」

オオタチと別れ、ローラは一度家に戻った。

一つ目は、三千ポケという彼女の金銭感覚では大金の一つか二つほど手前の金額のお金を自宅に置くため。たくさんのお金を持ち歩くのは防犯上危ないためである。

二つ目は、昼過ぎなので昼食をとるため。昨日外食だったので今日は自宅で自炊。

「何しようかな……」

キッチンに立ち、何をしようかと考えていると、テーブルに置かれた木の実のバスケットが目に入る。先日オオタチから貰ったもので、まだ手をつけていなかった。

「これでいいかな？」

バスケットから数個の木の実を取り出し、ローラは調理を始めた。

数十分後に出来上がったのは、味付けされたご飯の中に焼いたり炒めたりした木の実を交ぜたもの。

椅子に座り、早速料理を味わい――

「っ！？」

――突如として口から放たれる灼熱の炎。突然の事態に驚き、口内の“辛さ”を我慢し含んだものを思いだす。それは激辛木の実と呼ばれる――マトマの実。

一口食べると強烈な辛さに襲われ、場合によっては痛みも伴うらしいその木の実は、炎タイプが食べると高確率で“火炎放射”を吐きだすという。

もちろんローラは炎タイプは持っていないが、“火炎放射”が使えるのか予想外の味だったためか、無意識のうちに技を出してしまった。

――幸いにも焦げ目や火事にはならなかったが。

「な、何でこんなもの……」

マトマの実など、辛すぎてそのまま料理に使用する事は殆どないとなると、考えられる原因は“間違って入れてしまった”以外に考

えられない。

尤も、今の彼女にそんな思考が出来るとは考え難いが。

「おい。ローラ？」

ローラが悪魔^{マトマ}の実で“火炎放射”を吐いて、暫く経った頃。彼女の家を一匹のポケモンが訪れた。

来訪者——依頼を終えたハーディンは前足で扉をコンコン、と叩くが、家主^{ローラ}が出てきたのは数十秒後。どういう訳か赤く腫れた舌を垂れ下げている。

「い、一体どうした？」

「昼ご飯にマトマの実入れちゃって……」

“あの辛さ”がまだ残っているためか、喋り方が若干おかしい気がする。とにかく入って、とハーディンを招き入れ、彼にお茶を入れた。

「……なるほどなあ。だから舌が腫れてるのか」

前足で器用に湯飲みを掴み、中の温かいお茶を飲む。

ローラもコップに入れた冷水を口に含み、頷いた。

「甘党のお前にマトマの実なんて、相当ヤバかったんじゃないか？」

“火炎放射”まで吐くなんてかなり……」

「もう……ホントに死ぬかと思ったよ。そんなもの入れちゃったなんて思ってたから……」

会話からして、ローラは“甘党”らしい。つまり辛いモノ^{マトマ}など殆ど食わず、むしろ苦手と思われる。それなら“火炎放射”を吐きだしてしまうのも無理はない。

はは、とハーディンが笑っていると、そうそう、とローラがあるモノを取り出す。

「この本。昨日忘れていったんじゃない？」

取り出したモノ——昨日ハーディンが置いていった本をテーブルに置き、彼の前に差し出した。

「ああ、この本ならやるぞ。実際、昨日あんな事言ってたが、その本読んで理解できたのは半分だけ。後は専門用語やら何やらでサッパリだ。

逆に、お前はそういうの好きだろ？」

「まあ……貰っちゃっていいの？」

「いいっていいって。俺が持ってたって役に立たん」

「それなら、遠慮なく……」

あげると言うのだから、いらないと言う訳にはいかない。所有権の移った本を片づけ、話の区切りがついたところで本題に入る。

「——ねえ、ハーディン。私……旅に出ようと思うの」

「ほう。旅に……ハア!？」

単刀直入に放たれた“旅に出る発言”に、ハーディンは若干反応が遅れてしまった。冗談かと思っただが、彼女の表情を見るとそれは間違いであることに気付いた。

「な、なんで……そんな急に？」

「今……世界が大変なことになってるでしょ？ あなたの本を読んで、世界中のあちこちで大変な目に遭ってるポケモン達がいる——それを黙ってみてるなんて、私には出来ない。少しでも……ほんの少しでも、私にできる事をしたいって——」

——それは彼女は悩みぬいた末に出した“答え”。

探検家として、そして彼女の性格からして、困っている者を見遇うことなど到底できない。

だから、自分に出来る限りのことを——誰かを救うということを——したい。

その為に、彼女はそんな決断をしたのだった。

「まあ……お前らしいといつかなんといつか……本気か？」

「うん。中途半端な気持ちじゃこんな事言わないよ」

「だが……今は世の中こんな状態だ。危険な目にだって遭うかもし

れない。それでも……」

確かに、リスクはある。危機的状況に陥る可能性は、今の世界の状態を考えれば十分有りうる。場合によっては、死さえ考えられる。

「わかってる。危険があることは、昨日一晩中考えたから。それでも、探検家として、私は私に出来る事をやりたい」

彼女の決意は固かった。ここまで来てしまえば、もうローラは止められない。幼いころから彼女と親しかったハーディンがそれを一番分かっていた。

「お前の気持ちはよくわかった。なら——俺も一緒にいく」

「えっ？」

自分も付いていく——ハーディンのその言葉は予想外だった。なぜ。ローラは聞き返した。

「な、なんであなたが？」

「女の一人旅なんて、何が起こるか分からん。危険つつても変な輩に絡まれたりすることだってあるかもしれない。

それに、何かあった時は一人より二人の方が良いだろ？」

つまりは、一人ではやはり危険だ、ということだ。確かに万が一の時は一人より複数の方が対処しやすい。一人ではできないことも、二人ならば状況は変わる。そう考えれば、単身で旅をするより彼がついて来てくれた方が助かる。

「でも、そつちにも色々予定とかあるんじゃない？ それにこつちには依頼で来てるんだし、帰りが遅くなるとあなたの家族も心配するだろうし……」

「家族には電話一本ぐらい掛けとくさ。こつちでの用事も早めに終わったし。別に嫌なら無理にはついていかんが……」

「……じゃあ、お願い、出来るかな」

「嗚呼。よろしくな——」

差し出された手を握り返す……ことは身体の構造上難しいので、一方的に握られるだけとなったが、話は纏まった。

「で、いつ出るんだ？ ちゃんと計画立てていったほうが楽だとは思うぞ」

「うん。準備とかいろいろしなくちゃいけないから、明後日以降にしようかなって思ってる。何処に行くかもその間に」

「分かった。そのくらいが妥当だろ」

そう言い、ハーデインふと窓の外を見た。

いつの間にか陽は傾き、空は夕焼けに染まり始めていた。あまり長々と話していた気はしなかったのだが。

「準備は明日辺りから始めよう。俺も手伝うから」

「ありがと。助かるよ」

「気にするな。じゃ、俺はそろそろお暇するよ」

彼はそう言い、立ち上がる。

その時だった。コトリ、と彼の探検隊バッジが落ちる。ローラがすぐにそれを拾い、手渡した。

「落ちたよ。はい」

「ああ、スマン」

差し出されたバッジを口で銜え、もとの場所へ戻す。

「じゃ、また明日な」

「うん。またね」

挨拶を交わし、ハーディンはローラの家を後にした。

彼の姿が見えなくなるまで、ローラはずっとハーディンを見送っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1351x/>

Lora's trip

2011年12月1日14時53分発行